

市史だより

Gači-majā

第12号・2007年5月31日(木)発行

年3回 (5・9・1月発行)

編集・宜野湾市教育委員会文化課 市史編集係

〒901-2710 宜野湾市野嵩1-1-2

問い合わせ・情報提供先

☎ * (* ☎ * ☎

☎ (098) 893-4431

Fax (098) 893-4434

Kyoiku08@city.ginowan.okinawa.jp



激しい戦闘によって、焼きつくされた嘉数高地 1945(昭和20)年

1945(昭和20)年4月1日、読谷・北谷の海岸に上陸した米軍は、4月6日頃から、西原村棚原から宜野湾村の嘉数・宇地泊にかけて、日本軍との激しい戦闘を展開しました。

沖縄戦の時、日本軍が91高地と称した嘉数のウィーヌヤマ(現在の嘉数高台)は、戦闘にとって有利な場所とされ、日本軍の部隊が配備されました。日本軍は高地にトーチカと、その付近に陣地壕を設置しました。そして、地雷や対戦車砲、重火器などで攻撃し、爆弾を抱えて米軍の戦車に体当たりすることもありました。苦戦を強いられ、嘉数高地を“いまいましい丘”と称した米軍は、「嘉数地区で米軍が失った戦車22台というのは沖縄の一戦闘での損害としては最大のものであった」と戦史に記しています。嘉数高地は日米間の戦闘においては最激戦地でした。2週間余に及んだ攻防戦の末に、日本軍は浦添の前田に撤退しました。この戦闘により、日本軍や米軍だけでなく、嘉数の地域住民も犠牲となりました。一方、南部方面へ避難した村民の中には、日本軍から壕を追い出されて、殺害された者もいました。

現在、嘉数をはじめとし、市内の15の字に慰霊塔が建立され、戦没者を祀り、慰霊の日の前後に大抵の字が慰霊祭を行っています。沖縄戦の終結から62年目を経過しようとしています。慰霊の日も近づき、平和について改めて見つめなおしてみたいものです。

“ドーナツ型”のまち

はじめに

1945（昭和20）年3月26日に始まる沖縄戦は、きわめて多くの民間人の死者を出しました。そして地上戦であったがゆえの甚大なる破壊によって、人びとの生活基盤となる農地や居住地は荒廃し、なにより沖縄戦の最中に建設された「基地」の存在が、戦場を生き残った沖縄の人びとが生活を営む上で、いかに困難を伴ったかを思わせます。



収容所

戦場を生き残った宜野湾村民は、野嵩や島袋（北中城村）などに設営された民間人収容所へと収容され、「戦後の生活」をスタートさせていました。とはいえ、時おり収容所の中へ砲弾が飛び込んできたり、日本軍の兵士が民間人に扮し紛れ込むなど、民間人収容所もまた戦時下にありました。社会基盤が根底から破壊された状況のなか経済活動は停止し、収容所の人びとは死体の埋葬作業などに従事する対価として、米軍から無償で配給される諸物資によって、かろうじて命をつなぎ止めていました。

間もなくすると、野嵩や島袋に収容された人びとは、次々に北部の収容所へと移送され、宜野湾村民は各地へ離散していきました。一方、日本軍の組織的戦闘が終ったとされる6月23日前後から、米軍の保護下に入った民間人の数は著しい伸びを見せ、野嵩や島袋にも那覇や島尻の人びとが多数収容されました。しかし、この間も民間人の移送は絶え間なく続き、日本政府が無条件降伏した1945（昭和20）年8月15日まで続けられたといいます。その結果、生き残った沖縄の人びとの30万人のうち実に約25万人が、石川～仲泊以北に集中していました。これらの地域では、これだけの人数を支えるだけの食糧も衛生環境もなく、人びとは深刻な飢えとマラリアに苦しめられました。

基地と「帰村」

人びとが北部の収容所に集中する一方、中南部においては、基地建設・拡張が計画されていました。普天間飛行場も、日本本土侵攻のための飛行場としてこの時期に建設されました。米軍の報告書によると、中南部を軍事基地化する目的から、人びとを北部へ移送させたと説明されていますが、日本政府が無条件降伏した後も、引き続き米海軍、陸軍ともに広大な軍用地を確保し、かつ土地の開放を渋っていました。そのため、同年10月に再定住計画が発令された後も、人びとの「帰村」は円滑には進まず、特に中南部や伊江島において「帰村」は大きく^{とどこお}滞っていました。



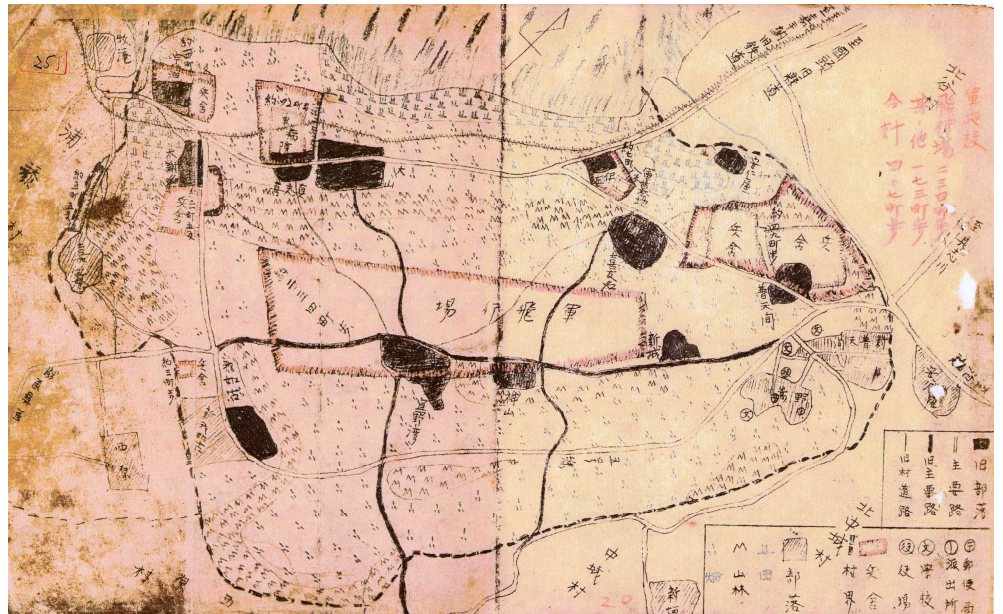
米軍による普天間飛行場建設

1945（昭和20）年6月

“ドーナツ型”のまち

このような状況にありながらも、軍政府の主導による「政治復興」は着々と整備され、1946（昭和21）年4月には戦前の市町村が復活しました。しかし、宜野湾村においては、村の中心部に普天間飛行場の滑走路が大きく横たわり、軍病院や兵舎も村の南部を中心に多く建設されていました。加えて軍用地の開放は遅々として進まず、人びとは野嵩や普天間といった村の一角に雑居することを余儀なくされました。たとえ野嵩や普天間からの移動が許可されたにしても、郷里に帰れた者は少なく、大半の人びとが割り当てられた土地に密集し、かつての集落からはじき出されるように生活を余儀なくされました。

その結果、まさに“ドーナツ型”に形成されていく戦後宜野湾村の姿が右の図からも予感できます。1950年代に入ると「基地」はさらに固定化され、この“ドーナツ型”のまちは、戦後宜野湾村における^{ゆが}歪んだ「復興」の姿を映し出しているかのようです。



宜野湾村略図 1946（昭和21）年10月作成

パネル展示会「沖縄戦と戦後初期の宜野湾」の案内!!

いつ: 2007（平成19）年6月18日（月）～29日（金）*土日と23日（慰霊の日）はお休みです。

どこで: 宜野湾市役所本庁1階ロビー

内容: 写真パネルを用いて、沖縄戦から戦後初期の宜野湾の様子を振り返りたいと思います。来年に刊行される市史8巻「戦後初期の宜野湾」の内容の一部も先取りして、みなさまにご紹介したいと思います。ご来場を心よりお待ちしております。



市史刊行の臨時ニュース♪



いよいよ来年の3月に、宜野湾市史第8巻 戦後資料編「戦後初期の宜野湾」の刊行を迎えます!! 内容は、第一部 野嵩収容所、第二部 戦後行政文書にみる戦後の宜野湾、第三部 宜野湾村民の戦後復興という構成です。宜野湾の村役場時代の戦後間もない頃の貴重な行政文書を活用して、戦後の宜野湾村の動きを捉えます。また、戦後の何も無い状況から歩み出した当時の人びとの生活について、体験者からうかがったお話をもとに、当時の生活を把握します。このように、行政文書と人びとの声を照らし合わせて、戦後初期の宜野湾の様子を明らかにしていきます。

現在、市史に掲載するための行政文書の打ち込み作業と、聞き取り調査で得た証言を見直したりと、着々と編集作業に取り組んでいます。刊行をお楽しみに♪

綱引きが復活します!!

字宜野湾で、1941（昭和16）年に行われて以来途絶えていた、綱引き行事が66年ぶりに復活されることになりました。このコーナーでは、綱引き行事の復活に向けて、盛り上がりを見せている字宜野湾の様子を紹介したいと思います!!

❖ 宜野湾の綱引き行事

旧暦6月に行われる綱引きは、戦前には14の字^{あざ}で行われ、字の人びとが一丸となって、刈り取ったワラで大綱を作り、豊年を祈るために綱を引いていました。戦前のようにワラ綱を用いて行われる綱引き行事は、現在では大山と真志喜のみとなりました。

字宜野湾でも、戦前には旧暦6月になると、宜野湾馬場（現飛行場内）で、字の人びとが前村渠^{メーシダカリ}と後村渠^{カシシダカリ}の二手に分かれて綱を引いていたそうです。

❖ 字宜野湾の綱引きの復活までの歩み

綱引き行事の復活のきっかけとなったのが、2006（平成18）年に行われた創作市民劇「じのん^{ウフガー}産泉」でした。字宜野湾を舞台にした劇のフィナーレで、戦前の綱引き行事を再現しました。それをきっかけに、地域のご老人から、綱引き行事を復活させてもらいたいという思いが強まったそうです。



市民劇で再現された字宜野湾の綱引き

❖ 字宜野湾の取り組み

強まる綱引き復活への思いは、区民にも広まり、自治会と郷友会では、昨年12月に実行委員会を結成して、今年7月29日（日）の午後7時から沖縄国際大学のグラウンドで、綱引き行事を復活させることを決定しました。



試作用のミニ綱

復活に向けて、綱作りをサポートする綱製作部会では、大綱を作るためのワラを金武町伊芸から購入して準備をしています。また、2分の1のサイズの縄も製作して、当時の縄に近づける努力も重ねています。さらに、綱引きを盛り上げる踊りや旗頭を担当する演舞部会と旗頭部会では、かつての旗頭も復元し、旗頭や演舞の練習も開始しています。



❖ 綱引きへの思い

地域のご老人から当時の綱引き行事を教えていただくことで、綱引きを知らない若い世代が手を取り合って、綱引きを復活させることで、伝統文化を継承し、地域の安全と繁栄を祈るとともに、自治会の活性化を図りたいと字宜野湾の仲村清自治会長は、綱引きへの意気込みを熱く語って下さいました。本番の綱引きが今から楽しみです。

ぎのわん

あの場所 ^{いま} ^{むかし} 今昔

～ クムイの巻 ～

クムイって何だろう??

クムイとは、自然・人工の溜池のことです。水道のなかった時代には、湧き水や井戸以外に、沖縄全域に農具やイモなどを洗う場、家畜の水浴び場、防火の目的でたくさんのクムイが存在しており、利用されていました。宜野湾市にも多くのクムイがありましたが、現在では埋められてしまい、かつての様子をとどめていません。今回はそんなクムイのあった地を訪ねてみましょう!! \(\geq \nabla \leq\) レッゴ〜!!



クムイ (沖縄市知花)



メーマーチューグムイのあった「こどものあそび場」

☆ メーマーチューグムイ ☆

字宜野湾の「こどものあそび場」(宜野湾2丁目13番)という広場には、字のクムイがありました。このクムイは今の広場よりも大きく、農作業の帰りに手足を洗ったり、牛や馬を水浴びさせるのに利用されました。この辺りには松の木が生え、畑や森となっていました。このクムイはメーマーチューグムイと呼ばれていました。



☆ ナガサクグムイ ☆

新城のいすの木通りは昔、ナガサクという名前と呼ばれ、いすの木通りの普天間第二小学校付近には、イー(上)ナガサクグムイとシチャ(下)ナガサクグムイという二つのクムイがありました。イーナガサクグムイでは牛馬の水浴びをさせたり、亡くなった人の衣服を洗っていました。シチャナガサクグムイは大きくて深く、子ども達が泳いだりする遊び場となっていました。



普天間第二小学校付近。

このあたりにナガサクグムイがあったという。



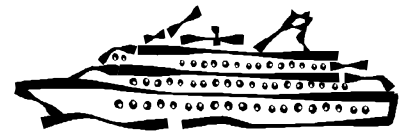
今回は、字宜野湾と新城の2か所のクムイを取り上げましたが、クムイは字宜野湾だけでも18か所、新城には6か所もあったそうです。クムイについて調べてみると、みなさんの家の近くにも、クムイの跡が見つかるかもしれませんね♪ (*^_^)ノ

と き 60年余の時間をかけ!

= 写真との出会い =

4月6日(金)に読谷村史編集室から「トリイ通信施設の方から『沖縄戦に参加した従軍兵士が沖縄本島の洞窟から拾われたアルバムを持ち主に返したい』と依頼があり、そのアルバムの中に伊佐の方の名前が書かれているので、心当たりある方を探してほしい」との連絡を受けました。早速、伊佐自治会に問い合わせしてみたところ、やがて3人の関係者が明らかになりました。

このアルバムは、所有者がフィリピン移民したのか、当地の絵葉書が多く、その一部に移民地で付き合いのあった方と思われる写真が数枚ありました。現在の浦添市城間や沖縄市の方以外に、伊佐の出身者の写真が5枚ありました。おそらく所有者は、戦争前に沖縄に引き揚げてきたと考えられます。



■ 上の写真は、両親の写真ということで、関係者(息子)が見つかりました。父親は明治42年(酉年)、母親は明治43年生まれ(戌年)で、父親が先に移民し、翌年に奥さんと呼び寄せたそうです。移民先では当初、麻栽培に携わっていたと思われますが、後に理髪店を営んでいたようです。また、住居もフィリピンから南洋パラオに移りました。太平洋戦争が始まり、父親は現地で徴兵され、戦後沖縄に戻りましたが、4月には沖縄戦が始まり、戦火をくぐり抜けてきました。



■■ 上の2枚の写真は親子で、『移民取扱人経由渡航者名簿一件』（自大正十四年一月至全年四月）第4巻（『沖縄県史』資料編11 移民会社取扱移民名簿〈自1919年至1926年〉近代3所収）によれば、写真に写る父親は1925（大正14）年2月に長崎港から三島丸に乗船して渡航したことが確認できました。

父親と娘は、太平洋戦争の際にフィリピンで亡くなりました。当時、父親は43歳、娘は15歳でした。母親と息子は、戦後（昭和20年末から21年初）に沖縄へ帰ってきました。



■■■ 左の写真は、（長男）お兄さんの写真ということで、関係者に弟（四男）さんが見つかりました。

弟さんによれば、兄は、明治末から大正初期の生まれで、当人（関係者）が幼い頃に移民したらしく、写真の兄についてはあまり覚えていないとのことでした。戦後、兄が沖縄に引き揚げた時に再会し、北谷町に住まわれたそうです。



＝ 60年余の時間をかけ！ ＝

今回、60年余の時間を経て、親族に写真が戻ってきました。写真に写る方々は、すでに他界されていましたが、親族にとっては懐かしさと喜び、悲しみの思い出のある写真でした。移民された方は、希望を胸に渡航しましたが、太平洋戦争によって多大な影響を受けました。なかには若くして亡くなった方もおり、写真の関係者から「今では父親の2倍の年齢も長生きしているさ」と力強く語る姿が印象的でした。

県内にはわたし達のように地域史を編集する係が33か所あり、今回はその一機関と地域自治会とのネットワークを通じて、写真の関係者が明らかになりました。読谷村史編集室の皆さん、伊佐区自治会役員の方々の皆さん、貴重な情報提供とご協力、ありがとうございました!!

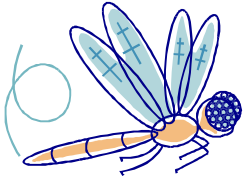
♪ ぎのわんクイズ ♪

沖縄県には県の木に制定されているリュウキュウマツに、県の花に制定されているデイゴがありますね。もちろん、宜野湾市にも市で指定した市の木と市の花、さらには市の花木もあるんですよ！みなさんは、これらの植物を知っていますか？次のクイズにチャレンジしてみてください！！

さあ、何問正解できるかな？

Q1. 宜野湾市の市の木はどれでしょう？

A. ガジマル B. リュウキュウマツ C. リュウキュウコクタン



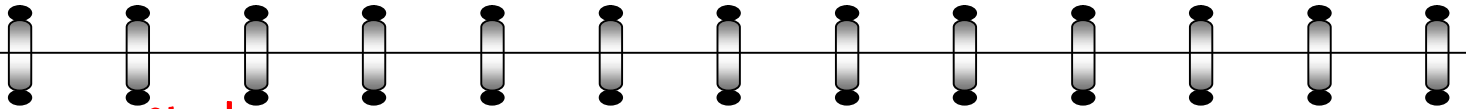
Q2. 宜野湾市の市の花はどれでしょう？

A. ブーゲンビリア B. キク C. サルビア



Q3. 宜野湾市の市の花木はどれでしょう？

A. サンダンカ B. デイゴ C. シークワァーサー



Answer Check

Q1 リュウキュウコクタン

黒木と書き、方言でクルチ（クルキ）と呼ばれています。沖縄在来の樹木で台風、病害にも強く、庭園樹、公園樹、街路樹などに広く利用され、古くから人びとに愛されています。沖縄の楽器「三線（さんしん）」のさおとして重宝され、家具、装飾などの用材としても貴重な木です。宜野湾市では1996（平成8）年1月11日に市の木に制定され、他市町村でも7つの自治体で指定しています。



Q2 キク

平安時代に中国から日本に渡来したもので、多くの品種があります。漢名の「菊」は”究極、最終”を意味し、一年の一番終わりに咲くことから名づけられました。中国で菊は、不老長寿の薬効があるとされ、菊酒を飲み長寿の祈願をしました。菊は皇室の紋章でもあり、日本の国花になっています。50円硬貨の表には、菊がデザインされていますよ。宜野湾市では1975（昭和50）年12月9日に市の花に制定されました。



Q3 サンダンカ

方言でサンダンクワと言い、デイゴ、オウゴチョウと並んで沖縄の三大名花とされ、国内では奄美以南に分布しています。花が年に3回咲くとか三段に重なるようにして咲くことから三段花とも言われています。花の色は数種あり、中でも鮮やかな紅色は沖縄の青い空に映えて美しい花です。宜野湾市では1975（昭和50）年12月9日に市の花木に制定され、うるま市でも市花に指定されています。



*引用：インターネットを参考にしました。

あなたは何問正解できましたか??この他にも宜野湾のシンボル（市章）や歌なども紹介されているので“宜野湾市のホームページ”をチェックしてみてね!!

☆ アドレス → <http://www.city.y.gi.nowan.okinawa.jp/>